

ことばと地域形成

——共同性の再構築へ向けて

岩
岡
中
正

(目次)

- (1) はじめに——いまなぜ、ことばか
 - ① 思想と地域の脱近代——地域思想の可能性
 - ② ことばと地域の再生——近代システムを超えて
 - ③ ことばを支える世界の再生——「言葉果つるところ」から
- (2) ことばの力——三つの試み
 - ① ことばと都市創造——「ことば文化交流シンポジウム」
 - ② ことばと身体・環境——「新しくまもと歳時記」
 - ③ ことばと伝統・文化——「熊本ルネッサンス県民運動」

(3) おわりに——ことばと地域形成

① ことばと共同性

② 問題点と展望

(1) はじめに——いまなぜ、ことばか

① 思想と地域の脱近代——地域思想の可能性

かつて私は論文「地域思想の可能性——思想の脱近代」¹⁾で、地域形成において意味と役割をもつ思想を「地域思想」と名づけて、地域のアイデンティティの中核として私たちが共有する地域思想の役割について述べた。つまり私は、かつての普遍的でグローバルな思想や近代以来の國家と不即不離のナショナルレベルの思想ではなく、ごく身近に私たちが直面する課題の解決策や地域のエートスの表現として生まれたローカルな思想に着目し、「いまここに生きる」私たちから生まれた「地域思想」の可能性について論じ、この「地域思想」こそが地域を作り支える内発的なちからの一つであるという考えを示した。

この転換は、大きくは脱近代パラダイム転換の一つとして、ナショナルレベルからローカルレベルへの「思想の脱近代」とも呼ぶべきものであって、ここで私は、地域思想が、地域の思想として内発性と生産性を持ち、地域公圏の中核として共同の記憶・物語・規範として生きていと主張した。私は、「地域思想」の特徴として、地域

性、内発性、生産性を挙げて、地域思想こそが地域性と普遍性を兼ね備えた「グローカリティ」（地球Ⅱ地域性）と「リアリティ」（現実性）をもつと考えているのである。

② ことばと地域の再生——近代システムを超えて

引き続き本稿では、地域思想を構成する「ことば」そのものについて考える。言うまでもなくコミュニケーション論理をはじめ、ことばの対話可能性が開く世界については既に論じられているが、本稿は私自身が関わったいくつかの事例を紹介しつつ、地域形成におけることばの意義という視点から接近する。つまり私は、地域における人々の感情や思いを相互に交わし合い蓄積してひとつの思想を内発し支え、生（なま）の生活に関わる、見えざる文化・風土・歴史・伝統の総体として地域を創出し構成する「ことば」の意味と役割について考えたい。

つまり、「近代」や「近代国家」から「人間」や「地域」へと、脱近代パラダイムへの転換が進む中で、ことばとその機能が国家からでなく、人間や地域からの思想の表現としてその役割を変えつつあるのではないか。私は、今日、政治や行政におけるのみならず、広く思想や文化もまた分権化・脱近代化・脱焦点化・グローバル化しつつあり、またそうであるべきだと考えるが、この時代転換の中で、地域とりわけ地域の文化や思想の面で内発し支え私たちがこれを共有する手段としてのことばの意味と役割について、あらためて考える必要があると考える。

言い換えれば、今日における近代国家や中央集権を中核とする近代システムの崩壊は、近代のことばの崩壊と一体のものである。今日、従来のことばは機械化・記号化し、身体という自然や生と乖離しリアリティを喪失した。国家から地域へとというパラダイム転換はすなわち、ことばが地域において生きた力を回復することであり、それは記号化した近代のことばからのパラダイム転換と表裏一体のものである。

考えてみればわが国における近代国家の形成は、その内実としての国民の創出であったが、その過程で各種の共同体、地域の思想やエートス、さらにはこれを育んできた産土（うぶすな）のことはや言葉が葬られてきた。この明治期の近代化国民化や昭和期の都市化大衆化の中で中央集権的で機械的機能的な近代のことは、ますます地域の人々の生活や感情から乖離するとともに、かつての共同体はもろろん私たちの内なる共同性をもことごとく破壊した。私たちは今日に至って、既に機能不全化した抑圧機構にすぎない近代システムに代わって、地域からの共同性の再構築の必要に気づき始めたが、そのためにはまず地域の人々が、普遍化記号化し機械化機能化して実感から遠ざかった近代のことは代わる、自分たちの生に根差したことは思想をその基底から再生させることからはじめなければならぬ。

③ ことばを支える世界の回復——「言葉果つるところ」から

近代システムを支えたことはが、無力化したのである。ことはシステムや制度と表裏一体のものだから、私たちはまず、ことばを回復せねばならない。では、ことばの再生とは何か、どういうことばが再生されなくてはならないか。この点について、石牟礼道子が示唆している。水俣病に関わり水俣病裁判を通して国家や企業という近代システムの本質を垣間見た石牟礼は、「人権」、「環境」、「連帯」「団結」といい「自立」といい、近代の市民主義や法・行政システムのことばには、どこか心に届かぬ虚構性や空しさがあることを直観していた。²石牟礼道子はことばと社会の関係について、かつての共同体が近代化によって崩壊したのは、まずことばからだと言っている。つまり、石牟礼によれば、

「言葉からまず壊れた、これが近代化の一番の芯だと思えます。田舎言葉を捨てて、均質な標準語で言うように

なりましたよ。官庁言葉も、裁判所の言葉も。……エイズかなにかのように浸透して内部からこわれます。」¹

さらに石牟礼は鶴見和子との対談で、この近代のことばの崩壊と再生について、以下のように述べている。

「なにしろ言葉は先人たちの意識の痕跡だから、近代的に進化、あるいは劣化、奇形化をまぬがれない。その言葉の霊的祖型をとり返すべく……」²

「いま、人類の歴史はたぶん大きくひとまわりして終わりにきたんだらうと思うんです。ですから言葉まで非常に衰えて、全部、人間の働きは内部から衰えてきて、この次、再生……する潜在能力があるのかどうか、試される時期に入ったのではないかと。……」

（言葉が全部機械化されて——引用者補足——）機械で言葉を生産していると思ってるけれど錯覚で、ことばを全部、分断機にかけて切つて捨ててると思うんです。言葉にならない情感とか悲しみとかも轢きくだいてぐじゃぐじゃにして、切り刻まれ捨てられる運命にあると思うんです、言葉は。……言葉もおびただしい消費財になっていませんか？」³

これに対して石牟礼は以下のように、ことば以前の世界——ことばを生み出す基底、たとえば「アニマ」（魂）、「くに」⁶、「風土」あるいは「存在そのもの」——に回帰することから始めるべきだとする。

「言葉を生み出すどこか、基底部の圃のような、存在の亀裂のようなどころから言葉は噴出して、……出てきた言葉とそれを生み出したエネルギーの圃の中はつながってると思うんです。」⁷

「アニマねえ、なんでしようねえ。……自由という言葉以前にもっと本質的に自由なものである。だれにも束縛されない、一番理想的な宇宙とともにあるもの、宇宙と一体になっているもの。言葉にすれば、魂という言葉を通じての言葉としていいですけども、もっとそれ以前に、存在そのものから、いつでもどこへでも飛翔することが

きる。⁸⁾

「文字が生まれてくるまでの長い意識の悠久の、悠遠な言葉の時代の記憶があつたつて、これは白川静先生がおつしゃっているけれど、そのほとんど無意識に近いような言葉だけの、言霊だけの時代にまだ生きている人たち。……その人たちが感じていくにというのは、いまはなくなりましたよね。故郷の山河。それが水俣病になっちゃつて……。それで切実にくを探しに行かねばならないほど、自分たちの周辺が、国の実質みたいなのが薄らいできてるよう

に思える。……
それで日本人が失つてしまったものの結果として、さまざまなことが出てきています。振り返ると水俣病が予兆として出てきたけれども、死んでいった人たちが求めていたのは、そういうご先祖様と一体になっているような、連綿と私たちの感性を育ててくれた心の風土。⁹⁾

こうして近代の言葉とその崩壊が社会の崩壊をもたらしたのだが、「近代の終わり」をたんなるポスト・モダン（脱近代）といった文化現象ではなくより深い文明的転換と考える石牟礼は、この言葉と社会の再生のために、人間とその言葉を超えた「言葉果つるところ」、つまり存在の根源へ回帰しここから再生するほかないと考えるのである。こうして社会、より具体的には、石牟礼が「くに」と呼ぶ「地域」の再生は、ことばとそれを生み出す基層である地域の魂や風土に回帰することから始まるのであつて、私たちはそのレベルから考え変えていかねばならない。そこで次に、ことばにどう力を取り戻し再生させるか、私自身が関わった三つの試みを通して、ことばによる地域形成について考えてみたい。

(2) ことばの力——三つの試み

私自身これまで関わったり、あるいは今も関わっている、以下の三つの運動は、全体として社会再生へ向けて「ことばの力」の回復を目指す試みである。第一は、「相互に語られる場としてのことば」、つまり人と人が語りあうことを通して伝えられることばの力を回復することによって、「場」としての地域やその文化を再生する試みである。第二は、「自然によって育まれる環境・風土としてのことば」、つまり人々と自然が語り合うことを通して生まれ共有されてきたことばの力を回復することによって、地域の環境や風土を豊かに再生する試みである。第三は、「次世代へ伝えられる歴史・伝統としてのことば」、つまり人々が次世代へ伝えることばの力を回復することによって、地域の歴史・文化を伝える力を再生する試み、の三つである。つまり、ことばがもつ第一は地域社会の空間軸、第二は環境軸、第三は時間軸に関わるもので、全体としてことばの力で、ことばと生の実感をより近づけることで、地域の歴史・文化的・生活圏やアイデンティティを回復し地域という場を再構築しようという試みである。

① ことばと都市創造——「ことば文化交流シンポジウム」

平成一九（二〇〇七）年八月二七日兵庫県伊丹市で、第一回「ことば文化交流シンポジウム」が開かれた。この趣旨は、同シンポジウムを企画した伊丹市都市創造部都市企画室都市ブランド戦略担当によれば、「ことば文化の発展に先進的に取り組んでいる全国の都市が集まり、各地の活動状況を報告し、今後のことば文化の発展に向けて

の意見交換・提言を行う。このシンポジウムの開催により、参加都市の交流とことば文化による町の活性化の取り組みを全国にアピールする」というものである。

これは文化庁と伊丹市の共催によるもので、現在ことばの文化事業によって都市創造に取り組んでいる次の六つの市が一同に会した。夏目漱石ゆかりの「草枕」国際俳句大会一二年目（当時）を迎える熊本市、高校生の俳句甲子園を開催する愛媛県松山市から「ことばのちから実行委員会」、「一筆啓上、火の用心……」で有名な「日本一短い手紙コンテスト」によってことばの対話性に着目する福井県坂井市（丸岡町）、「元氣っすへきなん世界俳句大会」を主催する愛知県碧南市、元祿の女流俳人・田捨女（でん・すてじょ）に因む「青春俳句祭」を開催する兵庫県丹波市、小・中学校で「ことば科」を新設するなど「ことば文化都市特区」作りに取り組む伊丹市の六都市が集って、どのようにしてことばの力とことば文化によって地域の力やアイデンティティを創造するかについて議論した。

ことばの力をテーマとした各種大会から特区まで形はさまざまだが、このシンポジウムで語られたことや参加都市の問題意識は共通している。これらの事業には、第一にオンリーワンの地域の文化的ブランド作りという文化・教育戦略や観光も含む経済戦略、つまりはハードからソフトへの都市戦略の転換だが、それはあくまで副次的産物にすぎない。これらの諸事業の背景には、今日のことばをめぐる状況に対する参加者の強い危機感を見ることができる。以下、熊本市から報告した私自身のレポートを引用しつつ、今日の「ことばと地域」をめぐる問題状況と私自身の問題意識について述べておきたい。¹⁰⁾

「つまり、今日よく言われる、ことばの乱れや貧困、言葉の持つ豊かさや力の喪失、さらにはそれと表裏一体のコミュニケーション力と社会形成の力の弱体化への危惧である。ことばは、個々人のアイデンティティと感情の形成、社会形成に不可欠のもの。いわば社会が今日、その根底のことばから揺らいでいるのではないか。

だからこそ、ことばと文化の問題は、地域づくりの基本的な問題でもあるのだ。ローカル・デモクラシーといい、地域公共圏といい、これらを支えるのは合意形成であり、ことばである。ビジョンを語り構想し実現していくには、生きたことばの力による以外にないのだから。

こうした点から、真に豊かな成熟社会の地域形成へ向けて、これらの「ことばの文化事業」は有効だし必要だ。ただ、私がいこれらの事業に共通すると思う最大の課題は、これらの事業を一過性のものに終わらせないためにはどうしたらいいかだ。これは難問だが、やはり、早く行政主導から市民参画による市民主導の運動に変わることだ。その中から日常的な学習が生まれ、それが文化として社会に定着していくだろう。

また、たしかに社会が生き生きするには、まずことばが生き生きと力をもっていなければならぬ。そこで問題は、人間と社会を支えるこの「ことばの力」を、私たちはどうやって獲得できるかということだ。これもなかなか難問だが、この点ではコーディネーターの坪内稔典氏の発言が示唆的だ、つまり今日、ことばに対してさまざまに不信感があるが、これ乗り越えるにはやはり、ことばは楽しいぞ、面白いぞという経験をたくさんするのが一番だ、というのである。この楽しい実感を通して、ことばが真に自分の生きた力になるのだ。……

考えてみれば、かつて私たちには、いかに声高でも、ことばが実感から遠ざかり、生き生きとした力を失っていた時代があつた。その時代は、社会もまた活力を失っていた。いま私たちは、真に生き生きとしたことばの力で、地域と時代を創り支えていかねばならないのである。」

以上、「ことばの文化交流シンポジウム」の各事例は、いみじくもことばと社会の崩壊に対する危機感をともにする諸地域・都市から、何とかことばの創造性を回復して地域を考え再生するきっかけにしたいという思いを示すものである。この「ことば文化」を考えるシンポジウムでは、今日、地域とことばのゆらぎや崩壊の危機に直面し

て、どのようにして人間と地域をつなぐことばを回復するか、そのためにはまず個々人がそのアイデンティティと感情形成においてことばの力を回復せねばならないという、ことばの重要な役割があらためて認識されたのである。

② ことばと身体・環境——「新しくまもと歳時記」

都市・地域創造の基礎が、いわば水平次元で地域内外の人間と社会をつなぐ「ことば」にあるのに対して、包括的総体的に身体と地域の環境や風土をつなぐものも「ことば」である。つまり、ことばが持つ身体性という視点からいえば、人間のことは人間の身体の一部である。身体と環境・風土の関係は、人間の身体が発することばによって自覚化される。逆に言えば、身体が感じ発することばが、私たちがそれと自覚する環境や風土を作っているのである。その「身体のことば」の、最も日本的象徴として、俳句における季語（ないし季題）があるだろう。いうまでもなく、季節のそれぞれのことば、とくに歌や詩における季語のことばはどの国にも民族にもあるが、とくにこれを俳句という日常普段の詩に固有のことばとして文化的歴史的に蓄積された「歳時記」は他国に類を見ない。身体のことばであり季節のことばである季語を介して、私たちは地域の環境や風土を感じると同時に、これらの環境や風土を創出してきたし、こうしてことばによって媒介されて生まれた環境や風土が地域文化や地域形成の基礎となっているのである。こうして季語の中に、私たちは地域とその風土の形成に与えたことばの力を見ることができ。季語はもちろんナショナルレベルのものだが、私はとくに地域特有の季語に注目しており、それらの中に、その地域にこめられた自然環境・文化・歴史・風土の蓄積やその込められた人々の思いやエートス、さらに風土と場の基層にある魂を見ることができ。

そこでここでは、ことばと地域の環境・風土をつなぐものとしての季語を集成した「新しくまもと歳時記」を通し

て、地域形成におけることばの力について考える。熊本日日新聞社と私たち編集委員会は約一年間の準備期間を経て、二〇〇六年四月一日から二〇〇七年三月三十一日までの一年間の毎日、朝刊に「新くまもと歳時記」を連載し、二〇〇七年五月、これをまとめて同新聞社から刊行した。⁽¹²⁾ 同書は、「連載に当たっては、一日一季語として冒頭の鑑賞句を据え、季語を熊本の風土とのかかわり合いの中で紹介しながら句の鑑賞を行った上で、末尾に数句の例句を挙げる体裁を取った」。また、同書の編者の一人として私は、本書に込めた風土地域性の意味を次の五点到ままとめて記した。⁽¹³⁾

「第一に、これまで歳時記は一般に、昔は京都、その後は東京を中心に編まれたが、私たちは熊本の風土性地域性を重視した。いうまでもなく気候に関する季語などは熊本での実感に近づけて配置したし、肥後六花の「肥後菊」「肥後椿」「肥後菖蒲」、さらには「ハイヤ祭」「風鎮祭」「頓写会」などのほか、「小楠忌」(横井小楠)「滔天忌」(宮崎滔天)「寸七翁忌」(宮部寸七翁)など熊本生まれの思想家や文学者の忌日も入れた。

つまりは「美しい熊本の再発見」で、この熊本に生きる私たちの足許を大事にしたいという思いである。俳句は生活実感に近くなければならないし、私は、俳句は私たちのこの産土^{うぶち}とそこで暮らしを言祝^{ことば}ぐ、肯定と自足の文学だと思っている。

第二に、この主題や作品の地域性に対して、他方で当然のことだが、文学性や普遍性にも配慮した。両者は決して矛盾しないどころか、徹底して地域を見つめることの中に普遍性と高い文学性があると私は思っている。今回、生活の中から生まれたたくさんの優れた俳句作品に出会えたことは、何よりの収穫だった。「不易流行」のうち、「流行」は中央にあり「不易」は地方にこそある。

第三に、以上と関連して私たちは、毎日の鑑賞句の作者は有名無名を問わず、一回しか取り上げないと決めた。

それは、機会均等というような便宜的理由からではない。そもそも、その作者の有名無名は、作品の良し悪しとは何の関係もないからだ。

第四には、とくに鑑賞句として平明な句がとりあげられたことである。「平明」は「平凡」とは全く違うものだ。感動が深くかつ平明である理解できることが大事で、それが文学性の基礎である。そしてそのことによって俳句は、俳句を作らない読者にも伝わるのである。……(中略)……

第五に、この編集を通して多分誰もが思ったことは、この俳句文学とそれによる地域再発見の感動を、私たちの共通遺産として次世代に伝えなければならぬということだ。今日の情報化社会の中で、私たちからことばの力、感動の力が奪われつつあるのではないか、私は危惧している。ことばに力を取り戻すためにも、この俳句文化を伝えていくことは、私たちの世代責任である。

最後に、この熊本の地にあつてこの地を愛し毎日を丁寧に生きている人たちへの共感をこめてこの歳時記を贈りたい。」

そこで、「ことばと地域形成」という視点からいえば、この地域の五人の編者、二十三人の執筆者によって千二百句の作品を収め、準備期間も含め二年がかりで作られた『新くまもと歳時記』の意義は、以下の通りである。

(i) 第一にこの歳時記の意義は、季語とくに地域の季語という「ことば」を通して地域の風土性、文化的固有性を再発見したことにある。ことばと自然との関係でいえば、風土や環境からことばが生まれ、ことばが風土や環境を生む、そのような地域のことばの「場」がここで育まれてきたのであつて、その象徴が季語であり歳時記なのである。

(ii) 第二の意義は、たしかに文学としての普遍性も大事なのだが、第一の地域性とこの普遍性は対立・排除するも

のでないどころか、両者は一体であり、むしろ地域性を深くポーリングしていくとそこに文学的普遍性があることを、この歳時記が教えてくれたのである。文学における真実は、足下の生活に根ざさねばならないからである。

(iii)さらに第三に、ことばと他者(社会)との関係でいえば、前述の第四点と第五点に関連するが、この歳時記が、地域形成における、ことばの「伝える力」の大切さを示している点である。私たちは具体的な生活の感動を季語という日常の自然・風土・生活をめぐることばの力で他者に伝えることによって、地域に共通の言語・文化空間およびこれを支える生活空間の基礎を形成するとともに、この共通の言語生活空間を次の世代に伝えてきたのである。

今日の過剰なまでの情報化社会において却ってことばの力が失われつつある中で本書は、地域の風土・文化・生活の再発見・再創造の感動を季語・歳時記という形で次世代に伝えるために編まれたものである。本書の中に、季語という「ことば」を中核とし、自然・風土・他者というヨコ軸と歴史・伝統というタテ軸から成る地域公共圏の基盤形成を見ることが出来る。つまり、季語、とりわけ地域の季語と歳時記は、私たちが直接、地域の季節・風土・環境と肌身を接した感じるといふ、季語がもつ身体性とそれによる共感と共同性のゆえに、地域の共同の生活圏公共圏の基礎―つまりは共同性―を考える確かな切り口なのである。

③ ことばと伝統・文化――「熊本ルネッサンス県民運動」

第三の事例は、「熊本城四〇〇年と熊本ルネッサンス県民運動」(熊本ルネッサンス県民運動)である。第一の事例の「ことば文化交流シンポジウム」がことばによる社会の関係性の再構築の全国的事例であり、第二の事例の「新くまもと歳時記」がことば(季語)による身体・生活と環境・風土をつなぐ地域的事例であるのに対し、この第三の事例は、熊本という都市のアイデンティティを、とりわけ「永青文庫」という文書(ことば)を生かして歴

史につなぐことよって再構築しようという地域の事例である。

この運動は、二〇〇三（平成一五）年、吉丸良治氏（現、会長）が熊本地域の文化・一般市民・行政・企業の各層によびかけて発足した研究会に始まり、二〇〇五（平成一七）年小堀富夫（熊本放送名誉会長・熊本県文化協会長）を会長として正式に発足した県民運動であつて、会員数は個人と法人あわせて八〇〇ほどである。以来今日まで二〇〇七（平成一九）年の熊本城築城四〇〇年の記念事業や二〇一一（平成二三）年に予定される九州新幹線的全線開通、あるいは熊本市の政令指定都市への昇格さらには道州制などの喫緊の課題への危機感に支えられた文化都市創造運動である。報告書に示された(1)趣旨、(2)具体的な骨子、(3)目標年次は、以下の通りである。¹⁾

〔1〕 県民運動の趣旨

加藤家、細川家の治政を中心とした近世熊本の歴史的文化遺産を再発見、再評価することを通して、今日の熊本に生かし、個性的で、魅力ある熊本を再構築しようとする運動である。

(2) 県民運動の具体的な骨子

(イ) 肥後学の振興と永青文庫の活用

(ロ) 歴史の見える魅力ある街づくり

(ハ) 賑わいの熊本創造

(3) 県民運動の目標年次

第一次目標 二〇〇七（平成一九）年の熊本城築城四〇〇年

第二次目標 二〇一一（平成二三）年に予定されている九州新幹線全線開通¹⁾

そこで具体的には、たとえば二〇〇八（平成二〇）年度の活動事例を見ると、次の三つの柱で活動している。具

体的に第一は、熊本大学に寄託された四三、〇〇〇点の細川家文書である永青文庫に関わる肥後学講座や古文書学講座および「歴史回廊熊本魅力発見の旅」のような、歴史・文化に関する講座やその成果の出版と普及であつて、文書ということばとその学習である。第二は、「熊本の祭りを考える部会」の行事である「みずあかり」や「坪井川を活かす部会」による「観桜坪井川園遊会」のような各種の参加行事である。第三は、「熊本城の利活用と城下町を考える部会」による各種のシンポジウム、フォーラム、サイエンス・シヨップなどの研究会や視察、などである。¹⁰⁾

これらの活動は、永青文庫という文書（ことば）とその学習を契機に広がっていった城下町づくりにほかならず、ことばがイメージへ、イメージが運動へとひろがっていく、文化と歴史による都市アイデンティティ形成の運動である。つまりここでは、ことばから生まれるイメージや運動が、地域生活圏の人々と時間や歴史をつなぐ地域アイデンティティと場の形成の中核的役割を果たしている。

このいわば自然発生的に生まれた、ことばの歴史・文化運動は、同時に町づくり運動、さらには地域の経済浮揚まで、まさに文化政策や地域経済も視野に入れはじめた。そこで、二〇〇五（平成一七）年に正式に活動が始まって四年目、一度立ち止まって、この運動を文化政策や文化経済学の視点から客観的理論的に考えるため、私たちは二〇〇九（平成二一）年十一月、文化経済学会副会長の後藤和子・埼玉大教授とルネッサンス県民運動の吉丸良治会長を熊本大学へ招いて「文化政策研究会」を開催した。これは実践（運動）と理論（学会）の最初の出会ひであったが、ここで、とりわけ九州新幹線の開通、熊本市の政令指定都市化の課題を踏まえてどのようにして熊本の都市アイデンティティを構築するか、たとえば熊本が目指す文化的歴史的都市イメージをどのように集約し鮮明化し合意形成しそのことによって住民の誇り（シビック・プライド）を高めるか、また、文化を素材として創造都市論で

いう内発的で創造性豊かなエートスをもった都市・地域に再生するにはどうしたらいいか、その要素としての文化的創造的人材をどうひきつけるのか、あるいはむしろ都市・地域住民の中から文化的創造的人材をどう育成するか、他の地域・都市およびその運動の内外の諸活動や市民との相互の関係あるいは各レベルの行政との関係など各種の連携をどのようなストーリーの下でどう作るのか、上記二名の報告者以外の実際に活動している市民・行政・研究者などの討論者も加え国際比較も交えつつ、議論が行われた。もちろん、以上の議論は始まったばかりだが、上記のような諸論点は既に出つつあり、今後さらに、展開する運動を具体的理論的にフォローしていく中で、この「ことば」の文化と歴史の資源をどう生かすかを考えなければならぬ。

(3) おわりに——ことばと地域形成

① ことばと共同性

以上の三例のうち、第一の事例「ことばの文化交流シンポジウム」は、ことばと地域社会の相互形成という視点からの、ことばの力の回復による地域社会内のコミュニケーションと地域アイデンティティの再構築、第二の事例「新しくまもと歳時記」は、地域におけることばと風土の相互形成という視点からの、一つの宇宙^{コウセウ}として地域全体を包含する環境や風土によって形成され、またこれらを形成することばの相互的な力の発見と回復、第三の事例「熊本ルネッサンス県民運動」は、ことばによる地域の歴史と文化の継承、つまりことばが歴史を作り歴史がことばを

作るといふ相互形成の視点からの、一つの歴史的文化的共同体として地域形成におけることばの力の回復、をめざす運動である。

こうして、これらは全体として、ことばの力で地域の共同性を回復しようとする運動である。その意味で、今回あげた三つの事例は、地域の思想の脱近代的再編を、ことばという基底から支える運動として評価できるだろう。ただこれらの運動には、以下の問題点がある。

② 問題点と展望

第一の問題は、とくに第一と第三の事例の場合のように、ことばによる地域形成が、地域「から」の脱近代的方向を志向しつつも、他方その動機としては、経済のグローバル化による国内外での地域（都市）間競争があり、ここには競争や効率という近代的価値観が前提にされてはいないかという点である。だとすればそれこそ、日本が明治以降進めてきた近代化とそのための地域と共同性の徹底的破壊と分断への道を踏襲することになりはしないか。つまりこの試みは、脱近代的で内発的な地域形成を目指しつつ逆に近代的競争原理の下に身を置くという自己矛盾をきたすのではないかという点である。

次にこの第一の問題とも関わる第二の問題は、これら三つの事例の担い手は誰かという点である。この点でいえば、第一の運動を担うのは主として文化リーダーと行政、第二の事例はメディアと文化リーダー、第三の事例は文化・経済界のリーダーおよびそれらと行政との連携、つまり全体として地域のリーダーと行政である。しかし、かといって、これらの運動がすべて「上から」の近代的な運動かといえば、決してそうではない。これらの運動では、地域間競争や地域浮揚という外面的経済的価値が語られる一方で、地域アイデンティティにおける市民の内面的な

誇りや熊本特有の季語の再発見のように身体性と生活に深く関わる地域の個性的なことを地域の真の豊かな財産として見る内面的視点もあることも忘れてはならない。後者の視点の根底には、地域という生活圏や環境圏に生きる人々の「自足」と「肯定」という近代後の価値観や存在の哲学への転換も見て取れるのである。¹⁷⁾

その意味で、前述の三つの事例には、近代的価値観に基づく「上から」の視点と、後者のような脱近代的な価値観に基づく「下から」や「内から」の視点が交錯しているのだが、私は、これら両者の視点を含みつつも、これら全体を後者の視点の方向へと徐々に転換させてこれを制度化していくことが今日求められていると考える。

そこで、社会転換における、①生活・エートスのレベル、②運動レベル、③制度レベルの三層構造からいえば、いうまでもなく①の基層転換が大事で、ここで生き生きとして地域を支えつなぐ生き生きとしたことばの力を、私たちが回復できるか否かにかかっている。もつといえはそれは、前述の石牟礼の主張のように、「ことば果つるところ」からことばを汲み取れるにかかっている。つまり問題は、近代における権力や知的権威として形骸化したことばではなく、身体性と共感によって共同性を生み出す、真に生きたことばの力を回復することが大事なのである。このことばの力によって、地域の社会形成・風土形成・歴史形成、つまりそこに存在するもの一切が意味のある存在の総体としての宇宙^{コスモス}としての地域が再構築されるのである。つまり、近代の「国」ではなくて、より大きな自然や魂という共同性をも内包する、石牟礼が「くに」とよぶ母郷（つまり風土・歴史・言葉が宿る根源的世界）と、これを支えることばやそれを生み出す一人一人の感性・まなざし・振舞いという基層的次元からの転換がいま求められている。「我」と「汝」という近代の二元論を超える脱近代的認識論とこれら感性・まなざし・振る舞いの問題について私は既に断片的には述べているが、よりまとまった議論については稿を改めることとして、ここでは、三つの事例を通して、ことばによる、より根底的なレベルからの地域の共同性の回復の方向について示唆する

にとどめたい。

(注)

(1) 岩岡中正「地域思想の可能性——思想の脱近代」(伊藤洋典編「近代」と「他者」成文堂、二〇〇六年、所収) 一六九—一八二頁。

(2) 岩岡中正「ロマン主義から石牟礼道子へ——近代批判と共同性の回復」(木鐸社、二〇〇七年) 一三四—一三五頁、一五二頁参照。

(3) 石牟礼道子「石牟礼道子対談集・魂の言葉紡ぐ」(河出書房新社、二〇〇〇年) 三九頁。

(4) 石牟礼道子・鶴見和子「言葉果つるところ」(藤原書店、二〇〇二年) 三〇三頁。

(5) 同書、六三—六五頁。

(6) 石牟礼道子が近代の「国家」(「国」)に対して「くに」と言うとき、それは「国家」の「国」ではなくて、人間が生まれて、最初に親和感をもった、生まれ里のような意味の「くに」(同書、一八四頁)を指しており、私はこれは今日言う「地域」のことだと考える。

(7) 同書、一三七—一三八頁。

(8) 同書、二四八頁。

(9) 同書、一八四—一八五頁

(10) 岩岡中正「ことば文化交流シンポ(伊丹市)に参加して——生きた力で地域と時代創造へ」熊本日日新聞二〇〇七年九月四日付。

- (11) 「季語」ないし「季節」は、俳諧や俳句の作品中で特定の季節を示す語で、両者はほぼ同義に用いられることもある。和歌でも季節に結びつく言葉は意識されてきたが、連歌においてもその発句はその季節に合わせて読むべきものとされ、季節を示す語が重要視された。江戸時代、俳諧が盛んになると季節も著しく増加し、近代の俳句になってさらに増え続け、今日通常の歳時記は五、〇〇〇をこえる季節を収める。(『現代俳句大辞典』三省堂、二〇〇八年、一七三—一七四頁、一七八—一七九頁)
- (12) 「新くまもと歳時記」新くまもと歳時記編集委員会編、熊本日日新聞社、二〇〇七年。
- (13) 龍神恵介「あとがき」同書、三九四頁。
- (14) 岩岡中正「風土性地域性を重視——地域再発見の感動を次世代へ」同書、三九一—三九二頁。
- (15) 「熊本城四〇〇年と熊本ルネッサンス」同県民運動本部、平成二二年度年次総会資料、二〇〇九(平成二二)年五月—六月、一頁。
- (16) 同、年次総会資料「平成二〇年度活動報告」、二—三頁。
- (17) この脱近代的価値観である存在・自足・肯定という価値観へのパラタイム転換については、岩岡中正「転換期の俳句と思想」(朝日新聞社、二〇〇二年)の中の「豊かな関係の世界——われら失いしもの」(一六—一七頁)や、同「石牟礼道子における存在の回復」(『熊本法学』一一五号、熊本大学法学会、二〇〇八年)一七一—一七二頁、を参照。
- (18) たとえば、根源的世界への回帰を通しての感性、気配、神話の回復については、岩岡中正、前掲書(『ロマン主義から石牟礼道子へ』一二七—二二八頁、一三九—一四〇頁、二〇三—二〇四頁ほかを参照)。